

明治・大正期の京都における工芸活動 —神坂雪佳を中心に—

矢野節子（神戸大学大学院）

意匠及び図案という用語は、明治6年（1873年）のウィーン万博後にdesignの訳語として生まれた。明治政府は殖産興業の一環として日本の工芸技術に輸出品としての図案を奨励した。それまで日本の工芸品を装飾していたものは古代模様などの伝統的な図案であった。そこで産業育成を目的として大正2年（1913年）より開催されたのが、農商務省主催図案及応用作品展覧会である。

この展覧会の開催には京都の図案研究団体の遊陶園・京漆園の影響がみられる。この二つの団体は京都工芸繊維大学教授の浅井忠と武田五一が中心となって活動していた。作風は琳派にアール・ヌーヴォーとセセッションを折衷した様式で、農展においても流行した。しかし農展の作品傾向を分析すると、アール・ヌーヴォーは一過性の流行であることが確認することができた。

浅井と同時期に京都で活躍した図案家が神坂雪佳である。雪佳は明治28年（1895年）、京都で開催された第四回内国勸業博覧会を機に皇室技芸員の岸光景に師事した。光景の影響をうけて琳派様式の工芸図案を制作し、それによって京都の工芸界を活性化させた。雪佳は図案集の出版、京都美術協会の機関誌の編集、農展をはじめとする公募展の審査員などを努めた。また佳都美会をはじめとする図案研究団体を主催し工芸家の指導にあたった。また、大正時代に台頭してきた百貨店での展示会を行うなど新しい販路の拡大にあたった。雪佳は自身を芸術家としての個人作家ではないとの趣旨を述べているが、これは工芸家の概念が曖昧であった時代のためと考えられる。明治時代の半ば頃までは光琳文様・光悦蒔絵は陳腐化した図案が多く、雪佳の図案が洗練された様式であり、現代においては作家とみなすべき存在であることは間違いない。

浅井の用いたアール・ヌーヴォーが一時的な流行であったのに対し、雪佳の琳派様式が定着したことを裏付ける作品として大正8年（1919年）に皇室より御下命の《歌蒔絵文台・重硯箱》があげられる。『古今和歌集』に取材した図案であるが吉祥文様は琳派文様と通じるものであり、献上品のため、個性を抑制しながらも独特の作風が感じられる。この歌絵による手法は、第四回内国勸業博覧会に岸光景の図案で出品された《秋草流水蒔絵螺鈿棚》に影響をうけていると思われる。光景の意匠は『古今和歌集』の歌意の芦手文様を散らしたものである。雪佳の制作する琳派文様とは日本人固有の文学的意味を内包したイメージであり、それ故に現代においても人々をひきつけるのではないかと思われる。

以上の考察より、雪佳の活動は明治政府の殖産興業政策に寄与しながら独自の作風を確立した。明治～大正時代に琳派文様を定着させたことは意義深く、これによって京都の工芸界に多大な影響を与えたことが推測できる。